



## 【オーラルセッション2】

「One Plan Approach ～野生動物と共存していくための包括的な取り組み」

### 「知っていますか？ ゼニガタアザラシと漁業をめぐる問題」

プロジェクトとっかり 藤井 啓 氏

はじめまして。藤井と申します。立派な先生方のお話の後で、私がトリをとるのは非常に居心地が悪いですけど、ただの会社員です。馬の骨がこんなところでしゃべっていいんだろうかとも思うんですが、せっかく機会をいただいたので、お話ししたいと思います。

私は、もともとは四国、徳島県の生まれでして、大学進学の際に北海道、帯広畜産大学に進みました。そこでサークル活動として、ゼニガタアザラシ研究グループというのが一部で有名なサークルなんですけど、ありまして、そこで初めてアザラシに出会い、何だかんだと色々な活動に携わらせていただきました。大学、大学院修了した後、北海道の畜産試験場、道立の機関なんですけど、に勤めておりまして、そこでは、畜産試験場ですから家畜それから農場周りの野生動物を対象としたものを研究するのが仕事、業務で、サイドワークとして土日、週末にはアザラシの調査も少しやるということをおととしまでやりました。

諸般の事情がありまして、一昨年、故郷徳島に戻りまして、それからはなかなか実際のフィールドに行ってアザラシを調査することは難しくなっているんですが、ただ、これまでの経験だとか、あるいは今も向こうの北海道で仲間たちがやっていることをこうやって皆さんに御紹介することはできるかなと考えまして、活動をごちゃごちゃとしているわけです。

きょうは、そんな中で「知っていますか？ゼニガタアザラシと漁業をめぐる問題」というタイトルでお話をしたいと思います。環境省が設置する

ゼニガタアザラシ関係の検討会の座長である羽山先生がいる前でしゃべるのもいかなんかと思うんですが、難しい質問があったら羽山さんに答えてもらうことにしたいと思います。

まず、西日本の方はやっぱりアザラシとの親しみがないというか、なかなか見る機会もないと思うんですが、ネコ目イヌ亜目アザラシ科ということで、アザラシです。行動圏はほとんど水域。これはイメージどおりだと思うんですが、一方で、休息あるいは子育てには必ず陸が必要です。陸あるいは氷ですね。流氷上のアザラシというイメージがあると思うんですけども、中には陸、岩礁を使うアザラシもいるわけです。

日本沿岸で、この5種ですね、ゼニガタ、ゴマフが一番メジャーかなと思うんですが、ゴマフ、ワモン、クラカケアザラシ、それから10年ぐらい前かな、タマちゃん騒動のときに有名になりましたアゴヒゲアザラシというのがあります。ゴマフ、ワモン、クラカケ、アゴヒゲの4種についてはいわゆる氷上型と言われて、流氷の上で繁殖を行う。

今回注目するゼニガタアザラシだけが岩礁上で繁殖する。ですから、生まれたときから黒い体をしています。アザラシの子供って、白いホワイトコートのイメージがあるんですが、ゼニガタアザラシは黒いまま、黒い状態で生まれてきます。

そのゼニガタアザラシ、Phocavitulinastejnegeriなんですけれども、地図の北半球に赤い色がついているところに広くPhocavitulina Harbor Sealは分布するんですが、その中で北海道からカムチャツカに分布してい



るのがこのゼニガタアザラシ、Stejnegeriであります。沿岸の岩礁帯を上陸します。左の写真はちょっと見づらいかもかもしれませんが、体の色と岩礁の色が似ているのでちょっとわかりづらい写真ですが、岩礁を上陸あるいは繁殖、休息に利用するというアザラシであります。

1年のライフサイクルです。5月から6月にかけてが出産のシーズンになります。出産後、3週から4週程度の哺乳期間ですね、母親とpup、子供と一緒にいる期間がありまして、それが終わった後にはすぐ交尾期に入ります。そうすると、3週間、4週間程度で子離れしてしまっ、あとは子供は1人で生きていかないといけないわけです。

交尾期が6月にありまして、夏、7月から8月にかけて換毛、毛がわりですね。アザラシの毛がありまして、それが夏の間は毛がわりのシーズンというのがあります。新陳代謝を促進するためと言われたりもしますが、この換毛のシーズンが一番、岩礁の上に上陸する個体数がふえるシーズンでありまして、個体数の調査はこの換毛のシーズンを中心に上陸を観察することで行われます。

もし皆さん、北海道へ行って、ゼニガタアザラシをウォッチングする機会がありましたら、お勧めは、数を見ようと思えば夏なんですけども、5月、6月の出産シーズン、子育てシーズンに行っていただくと、親子でいるところとかを観察することができます。

さて、そのゼニガタアザラシですけども、何を食っているのか。秋に襟裳岬で集められたふんを調べた結果です。タラが30%、カジカが25%、それからタコとか頭足類20%、カレイ10%。ほとんどがいわゆる底魚。あんまり速く泳いで逃げるとかしない。多分、こういう底魚はとりやすいんだらうなと思うんです。一部にサンマなんか含まれているという結果でありました。特にこの魚は好きだということではなくて、きっととりやすさみたいところが一番影響しているのではな

いかなと思われま。

北海道におけるゼニガタアザラシの上陸場です。休息や繁殖において非常に重要なサイトになるんですけども、ちょっと小さくて申しわけないんですが、襟裳岬がまず一番大きな、個体数も大きいし、面積も大きいという上陸場になります。そこから飛んで、釧路よりも東、厚岸、それから「ルパン三世」の作者、モンキーパンチの故郷として有名な浜中ですね。有名じゃないですか。それから、根室にはモユルリ島、ユルリ島という無人島があります。これらが主な上陸場とされています。

ゼニガタアザラシは、上陸場に対する執着性が非常に強いと言われております。ゴマフアザラシなんかは割と平気で港のテトラポッドに上がったりするんですけども、彼らは特定の上陸場を執着して使う傾向があります。

これは、北海道におけるゼニガタアザラシの数のこれまでの推移です。1940年代以前、データはないんですけども、漁師やそれからハンターへの聞き取り等で、推定1,500から4,800頭ぐらいだろうと言われております。その後、科学的な調査が始まったのは1970年代以降になるんですけども、最初の200頭から400頭の間、300頭程度からじわじわと上がってきまして、2000年代に入りますと、多いときには1,000頭を超える数が確認されている年もあります。

この棒グラフのうち、赤いところが襟裳岬以外、青いところが襟裳岬の数です。先ほど、9つの上陸場があるとお話ししたんですけども、にもかかわらず半分は襟裳岬に集中しているという状況になります。

さて、人とアザラシの関係ということで見ましょう。

左下、多摩川のタマちゃんですね。10年ぐらい前かな、物すごい社会現象になりました。

上の徳島新聞2015年、つい最近、徳島県にもアザラシが来まして、オオちゃん、デビュー。10年



前と変わらないんですね。結局、アザラシがあらわれるとその個体に対して名前をつけてペット化する、あるいはアイドル化する。デビューじゃないんですよ、別に。でもそういう傾向はいまだに変わらない。野生動物と人の関係を考えて、いかな態度かと思うところもあるんですけども、これをきっかけに、海の環境のこととか生態系のこととかを考えるきっかけになるのであれば、それもまたよしかなと思う部分もあります。

右のほうは、御存じ水木しげるの「妖怪大図鑑」からなんですけども、多分、江戸時代だとかそれ以前の本州、四国、九州にアザラシとかが急にでてきたら、妖怪だと思ったんじゃないかなと思うんです。こういう妖怪として見られたりしたこともあったんじゃないかなと想像するんですけども、一方で、北海道では有史以前から非常に身近な存在であったと。

これは松浦武四郎の「知床日誌」からの引用になるんですけども、それぞれのアザラシの文様だとかで分類して、それぞれに名前をつけるということをしています。ということは、それは分類する必要があって、密接にかかわっていて、利用していたということなんだろうと思います。

実際どうなのか。1970年代までは、人とアザラシの関係としては、まずハンティング、商業狩猟の対象であり、生活に密着した存在でありました。ちょっとこの写真は、ゼニガタアザラシの毛皮を使ったいい写真がちょっと見つからなかったもので、ゴマフの写真で申しわけないんですけども、例えばこういうふうにコートに使ったり、あるいはスキーのシール。英語でアザラシをsealというんですけども、スキーのシールというのは山スキーの裏側に張って、逆立った毛を使って滑りどめにして、斜面を登ったりするときを使う。自衛隊向けに相当の毛皮の需要があった時代もあったそうです。そういう生活に密着した存在で、かつ利用していました。漁業にとっては、魚を食べる動物ですから害獣だということです。

1970年代になりまして、このゼニガタアザラシが非常に今、個体数が減っていることがわかりまして、それは地元の人には知ってたんでしょうけれども、生態学をやる人間だとかが初めてそのことに気づきまして、保護活動が開始されます。

1980年代に入りますと、狩猟はだんだん衰退していきます。わざわざアザラシの毛皮を使って何かしようということもなくなってくるでしょう。生活様式の変化もあって、かかわりはだんだん薄らいでいくという中にあります。一方で、漁業にとっては相変わらず害獣のままです。

そこで、1970年代に調査が始まって、1980年代に入ってゼニガタアザラシ研究グループ、私が先ほど言いました大学のサークルなんです。当時は市民団体として設立されて、今現在は大学のサークルのような立場ですが、研究が継続されています。そしてまた、そのゼニガタアザラシ研究グループの活動の中で、研究する側が実際に浜へ行って漁業被害を受けている漁師と話をし、酒を酌み交わして愚痴を聞く、あるいは怒られるようなことを繰り返す中から、保護じゃだめだと。共存、そこへ行けないかというふうに、活動の方針がだんだんと変わってきます。

1990年代に入りますと、グラフで矢印で示した個体数がだんだんとふえてきます。漁業にとっては害獣のままです。一方で、観光資源として活用する動きが出てきます。右下の写真で、これはシーカヤックを用いて実際に海にこぎ出して野生のアザラシを見る観光が始まります。

また、1つトピックであるのが、えりもシールクラブという組織が設立されます。このえりもシールクラブというのは、被害を受けている漁業者、それから観光に活用する観光業者あるいは地域の博物館の学芸員なんかと一緒にあって、アザラシとの共存のことを考えていこうということで設立されました。これは、被害を受けている漁業者が会長なんです。これは非常に重要なことなんだと思います。このグループは現在も襟裳岬で活



動を続けていますが、残念ながら、この設立時からメンバーはかわってないそうです。高齢化しています。

2000年代以降です。個体数は、1980年代から見れば高い水準で、高どまっているように一見見えます。実際のところ、今後どう動いていくのかはちょっとわかりません。それから、漁業被害の顕在化。これは、実際に被害がふえたこともあるんでしょうけれども、漁業協同組合だったり、あるいは地元出身の政治家だったりみたいなものの動きもあって、漁業被害の顕在化が出てきました。社会問題化してきたところがあります。

観光業にとっては、1990年代に始まった活用から、2000年代に入ると重要な観光資源として定着するようになっていきます。被害の顕在化ということもありまして、行政も含めて対策研究に着手し始めています。2006年にアザラシ類保護管理報告書も北海道によってまとめられています。

これは、インターネットでどういうキーワードが検索されているかを見たものです。襟裳岬と一緒にどのキーワードを調べているか。一番上は、「襟裳岬 歌詞」ですね。吉田拓郎と森進一の功績は大きいですね。「襟裳岬 歌詞」が一番上ですけども、その下が、2番目以下は天気、観光、バス、アクセス、グルメ、そしてアザラシです。これは、襟裳岬に観光へ行こうと思って情報を集める人が、アクセスとかグルメとかと並べてアザラシも一緒に検索しているんです。これは、アザラシが襟裳岬にとって非常に重要な観光資源であることを示していると思います。

さて、一方で漁業被害なんですけれども、地元ではとっさり食いと呼ばれています。とっさりというのはアザラシのことです。我々のチームの名前もプロジェクトとっさりといいますけれども、とっさりというのはアイヌ語でアザラシのことを指します。今でも、浜の漁師たちはアザラシのことをとっさりといいます。

とっさり食い。この頭を食べられる、右側の写

真ですね、これは特徴的です。一方で、それだけじゃなくて、左側のほうでぐちゃぐちゃとなっているものは、見えると思いますが、腹を食いちぎられているものとか、もう完全にぐちゃぐちゃ、ミンチ状になったものとかいろんなものが網の中に揚がってきます。その全てがアザラシによる被害かどうかはまだわかりませんが、少なくとも、でもアザラシの胃内容物の調査なんかで、サケを食っていることは示されています。

襟裳地域では、その漁業被害はサケの定置網での被害が主なんですけれども、こうやって傷だらけにされてしまうと商品価値はなくなります。市場には出回りません。一部地元でツブガイの漁の餌に使ったりとかはあるようですけれども、二束三文でしょうね。漁師同士でやりとりしているので、幾らで扱われているかなんてまではわかりませんが、そんな商品価値としてはないと言ってもいいと思います。

北海道庁の資料によりますと、襟裳地域での被害額は年間4,000万円以上となっています。それから、この被害量は徐々にふえつつあること、それから被害地域が拡大しつつあると言われていきます。被害地域はもともと、やっぱり襟裳岬先端の上陸場のそばの網に集中していたんですが、その被害地域が拡大しつつあると言われていきます。

それから、見えない被害を訴える漁業者もあります。見えない被害というのは、網に入る前の魚をアザラシが食い荒らしている。それから、アザラシが網の中にいる、あるいは網の周りによって、入るはずだった魚が入らないという被害を訴える漁業者もあります。これに関しては、私個人の見解としては、ちょっと強欲かなと思います。漁業権は漁業をする権利であって、海の泳いでいる魚に対する所有権ではないので、それはどうかなと思うところもあるんですけれども、意見としてはあるということです。

被害を受けている漁の様子です。油代を使って、まだ暗いうちから海に出て、網を揚げたらこんな



のばっかし揚がってきたらそら腹は立ちますよね。

さて、被害は絶対的なものではなくて、相対的に捉えるべきものだと思います。魚がいっぱいとれて高く売れていけば、ちょっとぐらい食われたっていいんです。ただ、じゃあいっぱいとれて高く売れてるか。これは北海道庁のウェブサイトで開催されているマリンネット北海道データベースからデータを引っ張ってきてプロットして、近似直線を引いてみました。R二乗値が0.04とか0.09なので、この直線に意味はないんですが、ふえているようには見えません、どっちかというと減ってきてるかな。

それから、魚のとれるとれないももちろんあるんですけども、それ以外の要因としては、例えばこれは気象庁のウェブサイトのデータですけども、襟裳岬のところがプラス0.99アスタリスクとなってます。アスタリスクがついているので、有意に過去100年よりも温度は上がっている、水温は上がっているという情報です。これはきっと、魚の来住数なんかににも影響しますよね。

それから右側のグラフは、水産庁のウェブサイトからとってきました。漁業用燃油の価格の変動です。これもじわじわ上がってきているなど。平成24年のデータが一番最近のデータになっていますが、ことしの円安なんかを見ると、またことしはもっと上がっているのかもしれない。

では、そのような状況の中でどうやって共生を図っていかうか。2つに分類というか、整理できるのではないかなと思います。1つは、技術的あるいは科学的な課題。それからもう一つが社会的な課題。

技術的な課題というのは、実際にその被害を低減するための技術ですね。漁法の改良であったりするかもしれません。あるいは、数がふえてきて被害がふえたのであれば、その個体数管理をしてやろうという技術の開発もあるでしょう。あるいは、それらをうまく回すためにも生態は明らかに

していく必要があります。

一方の社会的な課題としては、先ほど被害は相対的なものであるというお話をしましたけども、まず漁業が安定化していないとだめです。それは、魚価の安定化であったり、あるいは、例えば漁期ですね、漁をしてもいい期間を調整するとかいろんな方法はあると思うんですけども、漁業の安定化、あるいはそれから被害に対する補償。アザラシによる被害があればそれに対する補償する仕組みがつかれないかとか、あるいは観光ではアザラシは資源になっているんだから、それによる利益を漁師に還元できないかとか、社会の仕組みづくり、そういう課題があると思います。

実際に行われていることを紹介したいと思います。これは環境省から資料を提供していただきました。

左側の図で、サケの定置網というのは1本の長いかき網、このかき網がずっと長く伸びていて、その左右にこういう箱がついています。陸に沿って泳ぎできた魚は、かき網に当たると流れに沿って泳ぐ方向を変えて箱に入るという仕組みになっています。ですから、最後に魚がたまる部分を金庫と呼ばれますけども、その前に網をつけてアザラシが入れないようにできないかという試みです。アイデアとしてはもう随分前からあったんですけども、自分たちが漁師にそれをやれと言っても、じゃあそれで魚がとれなくなったらどうするんだとか、あるいは襟裳岬は潮の流れの速いところですから、そこにごみが詰まったら網が壊れるんじゃないかとか、いろんな懸念があつてなかなか実行されていなかったんですけども、環境省も力を入れてやるようになって、一部こういう試みが始まっています。

今のところ、やっぱり魚は同じだけとれてアザラシだけ入れないというところまでは至っていない、なかなか難しい問題があるようですけれども、でも、こういう試みが始まっているのは非常に大事だと思います。



それから追い払いです。入れないようにするのもあるんですけど、追い払うことはできないかということで、右の写真は音波を発生させる忌避装置です。音を発生させたり、あるいは光を発生させたり、あるいは古典的には、漁師みずからやっていたんですけども、かかしを立てるとかいろんな方法がとられています。音に関する技術装置については、ことしもかな、また環境省の事業の中でも実施されるそうです。

個体数を調整してやろうということについては、まず左側の新聞の記事ですけども、絶滅確率10%以下ということで、要は個体数を調整するためには、その個体群がどういう状況にあって、どれぐらいやったらとってもいいとか、どういうもんだったらとってもいいだとか、いつだったらとってもいいとか、そういう情報がないとだめなんです。そういうこれまでの研究の積み重ねで、ようやくこういう絶滅確率みたいな数字もはじき出されるようになってきました。

じゃあ、実際にはどうやってとろうかということになるんですけども、今、もうとっかりハンターはいないので、揺れる船の上から鉄砲を撃ってアザラシをとる非常に高い技術が求められるんですけども、なかなかその担い手はいない。トド撃ちのハンターは今でも北海道にいますので、そういう技術を伝承してもらおうとかいうことも考えられると思うんですが、一方で襟裳岬は観光地なので、観光客の前でアザラシを撃つ行為をできるかという議論ももちろんあります。それは社会的な課題のほうですよ。わなでとる方法を今検討しているそうで、こういうわなの構造で、何頭とれたとかという報告も環境省のウェブサイトではちゃんと公開されています。

それから、具体的な対策、技術というよりは、そもそも相手を知ろうという意味での生態調査が行われています。個体数、個体群構成、繁殖、遺伝、行動範囲、行動パターン、食性、疫学とかですね。右の絵はちょっと小さくて見づらいと思

うんですが、これも環境省に提供してもらった図なんですけど、個体数航空調査の結果だそうです。私が学生でセンサスをやっていたころにはお金がなくて、飛行機を飛ばすなんてことは考えられなかったんですが、行政も動き出すとこういうことが可能になるということです。

調査をしている様子です。右上が、フィールドスコープで海を見ています。こういう地道な調査で、個体数は明らかになってきます。

それから左は、これ捕まえた個体の体重をはかっているところです。真ん中に黄色いライフジャケットを着ているおじさんが見えると思うんですが、これが先ほど言ったえりもシールクラブの会長で、被害を受けている漁師です。被害を受けている漁師がみずからこういう生態研究に参加する。

それから、左下は船でこれからアザラシをとりに行こうとしているところですけども、襟裳岬は暗礁が多くて潮の流れが速いところなので、地元の漁師の協力がなくてこういう捕獲調査なんて絶対できません。これはえりもシールクラブがあったおかげ、襟裳にそういう漁師がいたからいろんな情報が集まって、少しずつ生態も明らかになってきている面があります。

右下は捕まえられたアザラシ。頭に水色のワッペン、背中に発信器がついています。こういう調査を実施されています。ワッペンは、目視調査が容易になるようにということでつけてあります。

社会的な課題ですけども、先ほど言いました漁業の安定化、漁獲、魚価、魚の値段の安定化あるいは販路の拡大とか輸入量のコントロールとか、いろんなことがあると思います。それから、被害漁家の精神的なケアと書きましても、精神的なケアというところちょっと大仰な感じがしますが、漁師は非常にプライドの高い方々で、「俺たちは魚をとって生きてるんだ」「魚をとって暮らしを立ててるんだ」というプライドを持っています。ですから、被害補償だといって金だけ



渡したって、これは満足しない方が多いと思います。

そういう人たちにとって、被害を受けているけれども、「このアザラシがいることによって、俺たちは豊かな海に住んでいるんだ」という思いを持てるような何かケアが大事なんじゃないかなと思います。あるいは、調査に入った学生が漁師と一緒に酒を飲んで怒られる、これだけでも十分なガス抜き効果はあるんだろうと思うんです。実は、そういうところが大事だったりすると思います。

3つ目、アザラシによって得られる利益の被害漁家への社会的な還元。先ほど述べました、そういうとおりです。アザラシがいることによってプラスなんだという仕組みをつくっていけないか。

それから、個体数調査のあり方。先ほど述べました、じゃあ数を減らして被害を減らしてやろうという発想を実現するときに、じゃあ実際どうやってすんの、やっていいの、いや、それは地域の合意がないとできませんね。

最後に、さまざまな対策を持続可能にするための仕組みづくりと書きました。上に書いたようなこと、あるいは技術的なこと、いろんな取り組みされてますけども、それを実現して漁業とアザラシが共存していくためには、その対策を永続的に持続するための仕組みが要るんですね。単発で何か、「技術開発したから、はい、どうぞ」と渡してそれで終わりではうまく回らない。社会の仕組みとしてこういういろんな対策を継続していくため、あるいは発展させていくための仕組みが要るということです。

地域の自然とどのように付き合い、どのような地域社会を目指すのか。ゼニガタアザラシと漁業だけの問題ではないと。地域社会が、襟裳なら襟裳の人たちが、漁師を含め、どうやって襟裳の自然とつき合うか、どういう社会をつくっていくのかというところまで話をしないといけないんじゃないかなと思います。

いろんな対策を実施するためには、関係する利害関係者の合意の形成が非常に重要です。きょうの、前の2題のお話の中でも重要であるということだったと思います。多様な立場の地元の人に関心を持って、その関心を持っている利害関係者、ステークホルダーが立場を超えてフラットに話をする場が要ると思います。でも、今のところない。

これは、どうなんでしょう。環境省とか、えりも町とか行政が設置するのがいいのか、あるいは、例えばシールクラブのような市民の中から生まれてくるのがいいのか、それは多分地域のこれまでの歴史とか文化背景によってもいろいろあると思うんですけれども、とにかく何らかの場が要るだろうと思います。

その合意形成について、1つのエピソードなんですけども、左、2013年、十勝毎日新聞ですけども、当時、地元の漁業者、それから携わる研究者、それから担当の行政官が議論を重ねてしたら、試験的に何頭だけとってみましょう、捕殺してみましようという話になって、現場はもう準備に向かって具体的に動いていたにもかかわらず、某環境省の大臣がちゃぶ台をひっくり返したことがありました。もちろん、漁師は怒ります。当時、地元の漁業者と研究者、あるいは地元の漁業者と行政の間のこれまで積み上げてきた信頼関係はもうぐちゃぐちゃでした。

その翌年、2014年、環境省が自然保護官、初めてこの襟裳のアザラシを専門にする専門官を襟裳に駐在させました。蔵本さんといいますけど、彼も非常に熱心に頑張って、だんだんとまたその信頼関係ができ上がってきています。それによって、先ほど述べたような技術的な開発も進んでいると言えます。

さて、最後に、我々プロジェクトとっかりの活動を御紹介したいと思います。

ゼニガタアザラシ研究グループの出身者、あるいは襟裳岬に通ってアザラシの写真を撮って



るといふ写真家、地元の博物館の学芸員などによるボランティアな市民団体です。皆さん手弁当で活動しています。

活動の柱を2つ持っています。1つ目が普及活動です。きょう私がこうやってお話ししているのもその1つ目の普及活動に当たると考えますが、このアザラシと漁業の問題を襟裳の漁師とアザラシだけのローカルな問題にしてしまわないで、社会全体で解決すべき問題なんだと認識してもらうためには、まずこういう問題があることを知ってもらわないかんということで、普及活動をやっています。

それによって、社会全体の機運がこのアザラシ問題を解決しようというふうに動けば、それは例えば現在、陸でシカの対策がいろいろ進んでいたり、イノシシの対策が進んでいたりするように、アザラシについても社会の問題だとして対策するようになれば、地元で、浜で汗を流している方々の活動もより後押しできるし、応援することができますし、先に進めるための原動力となると思います。行政へのプレッシャーにもなるでしょう。

2つ目は業種や立場を超えての議論するための場、先ほど言いました、合意を形成するための場をつくり出そうということでありまして。これは非常に難しい。一応柱としてぶち上げてはありますが、なかなか前へ進むことができないでいるという部分があります。

普及活動については、具体的には今、全国の動物園、水族館等で展示をしたり講演をしたりということをやったり、あるいはインターネットで先ほどのページにこういうFacebookページを立ち上げたりして、情報発信をやっています。それから、もう一つ議論の場の創出としては、いきなりその場をつくって議論をとというのもなかなか難しい。私も北海道の地元にはいないし、もちろん地元の北海道、襟裳にいる仲間もいるけれど、なかなかその場をつくるだけのことができないので、まずはその基盤づくりとして、漁業者と

か担当行政とか研究機関等の連携を図ってネットワークをつくって、その議論の場をつくるための基盤を今現在つくっている状況になります。

これはちょっと活動の写真をこの後見てもらおうかなと思うんですけども、札幌の円山動物園のアースデイのイベントに出展したときです。歩くアザラシです。

札幌のC I S Eという団体がありまして、これは札幌あるいは札幌近郊の博物館、それから動物園や水族館なんかが連携して、体験学習を推進しようというグループです。その活動の中にトランクキットをつくろうというのがありまして、つまり出張授業であったり、あるいはこういう展示をするときに使う標本とかパネルとかを1つのトランクにまとまるようにつくってやろうという、そこに我々プロジェクトとっかかりも参画しておりまして、アザラシのトランクキットをつくりました。この着ぐるみはその中の1つです。

左が、大阪で行われたホネホネサミット、一部で有名な会議だと思っておりますが、での展示の様子。それから右は、これはちょっと変わり種なんですけども、銀座の画廊で動物園展というのがありまして、そこに参加したときの様子です。

これはズーラシアでの展示の様子。ズーラシアで海のSOS何とかという企画展がありまして、そこに参加しました。もちろん、パネル、写真を展示するんですけども、右下のやつは、立っているのは漁師役、寝ているのはアザラシ役で、寸劇でもってアザラシと漁師の間にある問題なんかをわかりやすく子供たちに伝えようという試みでやっています。

それから、実際に本物の野生のアザラシを見てもらおうということで、観察会を実施したりもしています。そのときには、アザラシだけを見るのではなくて、セットとしてサケの水揚げですね、漁師、漁業の様子も見てもらうと。これは地元の漁協の協力もあって、こういうことが実施できています。



続きはウェブでということなんですけども、我々はさっきも言ったとおり、100%ボランティアの活動でやっていますんで、大きいことをなかなかできないんです。でも、週末だけしか活動できない我々のグループでも、細く長くこの活動に携わり続けることはできるかなと考えておりますんで、ぜひFacebookページに「いいね！」していただければと思います。

最後のメッセージになるかと思うんですが、手前、アザラシが上陸していて、奥に漁船です。同じ海の恵みを人もアザラシも分け合って、これまでやってきた。これからもそれを維持できるようにしたい。そのためには何をしたらいいのか。我々も考えるし、皆さんにも考えていただければと思います。

以上です。ありがとうございました。

○高見 どうもありがとうございました。

ただいまの御講演に対しましての御意見、御質問、何かございますでしょうか。特によろしいですか。

○江崎 現在、サケの定置網をやっている限りは、ゼニガタアザラシは漁業者にとってはすごく憎き敵なわけですね。かつての漁民にとって、アザラシはやはりずっと……。

○藤井 ……害獣であると。

○江崎 やっぱりずっと害獣なんですか。

○藤井 一方で、とってその肉を食べる対象でもあったんで。

○江崎 やっぱりそうですか。

○藤井 両面性があるんですよ。

○江崎 でも、きっと昔だから食べたんで、今はそれを食べてもおいしくない、というかそれは法的に無理なんですか。

○藤井 法的には、多分そうですね。流通に乗せるとなるというんな問題があると思いますけれども、おいしくないです。毛皮やなんかは、もしかしたら活用の方策があるかもしれませ

んが。

○江崎 ただ、定置網であるからこそ、ごっそりやられると考えていいんですか。

○藤井 そうですね。1つの箱の中にたまっているところにアザラシが入ったら、もう一網打尽に全部やられてしまいます。

○江崎 なるほど。それから、前のほうで出されてたとは思いますが、個体数が、減少傾向がどうでした、済みません。

○藤井 1980年代までは低い水準だったんですけども、それが1990年代に上昇してきて、現在は高いところでとまって、また停滞しているような状況です。

○江崎 ということは、漁民にとってはアザラシがふえたから被害がふえてるという、事実はどうか、因果関係はわからないんですけど、そういう意識はあるわけですね。

○藤井 意識はあると思います。

○江崎 なるほど、そうですね。はい、どうもありがとうございました。

○高見 ほか、何かございますか。

○質問者 済みません、観光資源としての有効活用というのは、経済的にはどれぐらいの効果があるんですか。というのは、昨今ちょっと問題になっていたイルカの追い込みに関して、富戸漁港では以前、非常に大規模な追い込みをやっていたんですけど、世間的なこととかいろいろ問題、イルカの肉が果たして必要とかさういったことから、富戸漁港からイルカウォッチングの船を出して、イルカ漁をやめた漁師さんも結構いらっしゃるんですけど、この場合には、例えば観光資源化して、ある程度の収入を得るような規模はあり得ますか。

○藤井 被害量、被害額に対しては全然微々たるもんだと思います。現行、実際に船を出してウォッチングをしているのは、先ほどお見せしたシーカヤックをやっている旅館が1軒、それと遊漁船を出している旅館が1軒、2軒だけなん



です。それ以外のところ、例えば岬の先端から  
双眼鏡を用いて見るなんてのは誰でもただで  
できますし、あと風の館という博物館が岬にあ  
るんですけども、そこで展示パネルを置いた  
り双眼鏡を置いたりして見せているのはあり  
ますけれども、多分、被害額を補填するほどの  
収入はなかなか今後も見込めないんじゃない  
かなと思います。

○高見 済みません。ほか、どなたかよろしいで  
すか。

どうもありがとうございました。

○藤井 ありがとうございました。